

あれから概ね30年の月日を経ようとしてしています、私も少しずつ記憶も薄れていくこの頃です、表となり、陰となりご支援頂いた大勢の皆様方、折角の記録を提供して頂いた方、又、其れを取り纏めに奔走して頂いた方、記録等ご提供頂いて数十年になんなんとしており、今更ながらでもあり、又、記録の極々一部ではありますが私の記憶が失われる前にと思い立った次第です。

尚、現時点でこういう形で公開することに当時の隊員皆様方、又、記録執筆者皆様方に改めてご承諾頂いた訳ではありません、従って申し入れや抗議があればこの投稿を削除することもございます。

もし宜しければお立ち寄りください。

このHPには、ヤマレコと重複しない記事を投稿しております。

by satoiizama





おもしろトレッキング記録(後発隊遠征日誌より)

後発隊メンバー Sa・Ta・Ya・Nag・Im

これは、9月10日に日本を出発した後発パーティーのユーモラスなトレッキング記録です。資料はIm隊員の日誌より作成されたものですが、ここには彼女の目をとおり、その感性でネパールの様子が記されています。

9/13 カトマンズ～カリカスタン 天候 晴れのち雨

ドアや助手席など木で補修され、その上から原色のペンキできれいに塗装されたトラックに乗り込んでみると、車内では香がたかかっていた。香を炊くのは縁起が良いのだそうだが、期待を胸に秘めた出発日に不安気な顔色でお互いを見詰め合ったのが印象的だった。今日はランニポアの小学校を訪問し、文房具を贈る。カリカスターでポーター数十名？を雇う。

・しょうのう事件

今日の宿はダイバン小屋。2階建ての木造小屋で、私たちは2回のベッドのある部屋で休むことになったのですが、その時しょうのう事件が発覚する。私は虫に噛まれるのが嫌で、シュラフの中にしょうのうを入れていました。そのシュラフが食糧品と一緒にプラパールに入れられていたのですが、する

めがしょうのう味のガムに変身していたのです。酒のあてにするはずのするめが……同行する彼らの激怒を受けたことは言うまでもありません。特にTa氏は、あの黒い顔を真っ赤にして噴火してしまいました。

9/14 カリカスタン〜ドウンチェ 天候 晴れ

トラックに揺られてしばらく行くとガネッシュが見え、やっとヒマラヤに来たという感動が込み上げてくる。道中、崖からトラックが転落し、無残な姿で横たわっている残骸が目に入った。私たちを乗せているトラックも強引に道なき道を突進する。左右上下に激しくゆれ、思わず手摺を握る手に力がこもる。そんな時、横に座っているSa氏が「ヒュー恐い」と悲鳴をあげるのを聞いてしまいました。ちなみに、Sa氏は大型トラックの現役名ドライバーである。

-

・石鹼事件

ドウンチェに着き、天気も良いので、タオル等洗濯しようと村の水場に皆で並んでいた時の事。私たちの唯一の文化的生活の香りのする貴重な石鹼で、村の男がしらみがいそうな彼の服を洗いだしたのです。皆、目が点になってしまいました。返してくれと、手まねで言うのですが返そうとしません。そこで、Ya氏がたまりかねて、「おい！おっさん、かえさんかい！」と河内弁で怒鳴りつけました。すると、その村の男はニヤッと笑いながら石鹼を返してくれたのでした。言葉は違っても雰囲気を通じるものなのです。

・ダイナマイト事件

トラックが突然止まってしまう、どうしたのだろうと外に出てみると、他の車も停車していました。ドライバーやシェルパたちはトランプをやりだしました。いったいどうなったのだろうと私たちはボーッとしていると、彼らがわいわい騒いで後方に走り出したのです。そして、車の陰に隠れようとしているのです。私たちも何がなんだかかわからないまま、彼等について一緒に走り出しました。人間の心理です、これは。何秒か後にドカーン！という物凄い音と小さな石がバラバラと降ってきたのです。なんと、前方で道路工事のため、発破作業をしていたのです。

・屋食事件

道路工事が終わるのを待っているとき、ポーター達が火を起こし、大きな鍋になにやら屋食を作り出したのです。鍋にふたもしないものですから、灰が入ろうがおかまいなしです。それを見たNag氏は何を勘違いしたのか自分たちの昼飯だと思い込んで、Ya氏と一緒に必死で灰を払い、彼等に世話好きのNag氏は、ご飯の炊き方を指導していました。そんな彼らをポーター達は親切に思ったのでしょう。屋食を彼等に分けてくれたので。黒焦げがあるご飯に灰にまみれたルーがかかったカレーライス！？を口にしたら彼らの顔といったらなかったです。

9/15 ドウンチェ〜シャブル 天候 曇りのち雨

ジェットコースターよりスリルのあったトラックとさようならして、いよいよB・Cに向けて歩き出したのですが、あいにくの天候です。今日はバルクー村の小学校を訪問し、文房具を贈。こんな田舎の小学校

でも英語の授業があるのを見てびっくりしました。皆は、かわいい15才の女の先生に興味があるようでした。鼻の下を長くして彼女を見る彼らの目尻が下がっていました。歩いていて、ふと足元を見ると導火線が埋まっているのです。背筋がぞっとして、思わず早足で歩いていました。休憩のときに気づいたのですが、Sa氏の靴下が赤く染まっていました。そうです、彼が最初のズガ(ヒル)の餌になったのです。その傷痕が帰国してからも治らず悩まされていました。

・とんだ勘違い

木の葉の上を怪しげに歩く黒い虫を見て、私とNag氏はネパールにもシャクトリ虫がいてるんだと2人で納得していましたが、その虫こそが恐ろしいズガ(ヒル)だったのです。

9/16 シャブル〜ラマホテル 天候 雨

雨降りやまず、なんとなく憂鬱なトレッキングです。おまけに、今日はズガの谷間を通過しなくては行けなかったのです。皆は足や腕から血を流し、ズガに襲われた後が無残でした。私は幸いにも一箇所もかまれませんでした。これは、きっとあの、しょうのう効果だ。やったー！と密かに思いました。

・ラマホテルのおやじさん事件

今日の宿泊地、ラマホテルといってもほんのほったて小屋に着いたとき、冷えた体を温かいティーで私たちを迎えてくれたのが、小柄でネパール帽をかぶっていたおやじさんでした。皆で火の周りを囲んで、ぬれた靴下、ジャージを乾かしていた時の事。ふと、その親父さんが足の指を数えると、1, 2, 3, 4, 5, 6! ? えっと思い、もう一度数えてもやはり6, 6本あったのです。そのおやじさんと意気投合したSa氏は、大好きなお酒を酌み交わしていました。そして、自分の名前を覚えさせてしまいました。私たちが帰えるときも、そのおやじさんはミスターサトーと覚えていましたし、私たちの名前を書いた紙切れをポケットに入れて持っていました。ネパール人の素朴さを見たように思いました。

9/17 ラマホテル〜ランタン 天候 雨のち曇り

針葉樹林帯をぬけて歩いていき、標高 3000m を越すあたりから気持ちの良いステップ地帯になる。牛や羊が放牧されていて牧歌的な風景の中にランタン村がある。周りの自然とは対比的に、彼らの生活は不衛生だったのが印象的。

-

・山ちゃん事件

ゴラタベラのチェックポストで昼食を取り、大休止をしている、そのころには雨もやみ、気を取り直し歩き始める。ところが、Ya氏の姿が見当たらないので、皆で「山ちゃん」「山ちゃん」と呼んで彼を探していたのです。すると、ポーターたちもまねをして「山ちゃん」とそれぞれ口々に呼んで歩くのです。実は、彼は下痢をしていて、きじ場を探すため姿を隠していたのです。ぼそっと姿を現した時の彼の表情は心なしかやつれていたように思います。

9/18 ランタン～キャンジン～ランシサカルカ

さわやかな草原地帯には、赤や紫、黄色の花が咲き乱れ、エーデルワイスの花が群生している。3000m を越えると牛や羊に変わって高所順応の良いヤクと呼ばれる牛によく似た動物が放牧されている。「モウー」と鳴くのだろうかとかわざわざ近寄っていくと、そいつは「ガオー」となくので、びっくりしたのを覚えています。カルカでは、ヤクの小屋にたまったフンを吐き出し炉に入れ、まるで弥生時代の住居に住んでいるような体験をすることが出来ました。この日、感激にも先発隊のNa隊長氏、Ma坊がプラブーツを持って B. C からおりて来てくれました。

・高度障害で牙を無くした熊ちゃん

最初に高度障害に見舞われたのは、以外にも一見見ただけでは、ネパール人かなと思われるような Ta 氏だったのです。朝食もまずまず、元気のない顔で、水筒と現金を入れたかばんを両手に持って肩を落とし、一人とぼとぼ歩いていました。その後姿は、熊ちゃんには似つかわしくない哀愁が漂っていました。しまいには、現金の入った鞆も私が持ってあげました。

9/19 ランシサカルカ～B. C 天候 晴れ

雪などあろうはずがなかったのに、カルカからはプラブーツ、スパッツが必要となる。天候もよく雪焼け防止のため、皆は日焼けした黒い顔にファンデーション、白いリップクリームを塗り、異様な面立ちになり出発する。

4200～4700m までの登りとなる。全員、体験したことのない高度での行動はやはりつらく、Na隊長氏、Ma坊らに励まされながらゆっくりと進む。昨日、あの元気がなかったTa氏は、今日は嘘のように私たちの前を歩いている。ガンチェンポ、ウルキンマ、ランシサリ、カンシュルムの山々が日本では見ることの出来ない姿、形を私たちに見せつけてくる。ランタン氷河の上に B. C のテントが目染まった時はとうとう来たんだという実感が込み上げてきた。その日の夕刻、大きな太陽が白いドルジェラクパを赤く染めていく光景は、隊員全員の心に焼きついていることと思う。

追加 Oo(Ma坊)氏の見たネパール・・・

「ウンコとダニの町、カトマンズ」

あの憧れていたヒマラヤの国、ネパール。ホテルのバルコニーに腰を掛けてヒマラヤの山々を悠々と眺め、そこにミルクティーが運ばれてくる。「ヨシ！今日はアッタクの作戦会議だ！」……夢。着いた国は、ヒマラヤは見え、町を歩くとやたらとウンコだらけ。街路樹の所には牛がたむろしていてメンチを切ってくる。そして、最初に入った茶店でたきだしのミルクティーを飲むと、お尻はダニ噛まれてぼこぼこ、あくる日は下痢。長年の夢ははかない一日に終わった……。

「楽しい？トレッキング。ネパールショック！！」

その1.トラックに乗れば30分でエンスト。ラジエターに川の泥水を入れて、さあ出発

その2.トラックの残骸が眼下に見えてくる。「はいはい、皆トラックから降りて」

崖から落ちるかもしれないからねえ～

その3. なんだ！前から歩いてくる男の子は？ゲ～，血の付いた羊の生首を持っているぞ～

その4. ポーターにもらった行動食. さあ食べ！！

その5. なんだ！あそこでしゃがんでる男の子は？あつ，お尻がかまれる！！お尻のウンコを犬が食べてるぞ！

C1 向けて荷揚げするメンバー

ベースキャンプにて(ランシサ氷河上 4600 付近)



タクティクスと実際(Na隊長記)

1983 年雑木の会結成 10 周年記念事業として海外遠征の声が上がり、ネパールヒマラヤへと行った。

私たちの会員にはネパールトレッキング経験者は 2 名いるものの本格的な海外遠征となると初めてのことで、私たちは海外遠征のいろはから勉強することになった。

まず、海外委員会を設け、毎週の勉強会を開き、種々の情報収集から始まった。

大阪労山はじめ各方面の山岳関係者の皆様方から海外遠征の基礎から教えを乞い、多くの助言を頂いた。特に私たちの目指すドルジェラクパに関しては 1982 年すでに第二登をなされている豊田山岳会の S 氏より同峰遠征時のお話と貴重な写真の提供を受けた。

また、私たちの会からも 1984 年(8～9 月)ドルジェラクパ偵察隊を送り、我々のルートとするドルジェラクパ西稜のルート確認を行い、写真と数々の情報を持ち帰ることが出来た。先の豊田山岳会の資料と私たちの偵察隊の調査から核心部は、6000m 付近のナイフリッジと 6500m 付近のナイフリッジであろうと思われたが、我々の隊で頂きに立つことは可能との核心はほぼ得られた。しかし、未知の高度において我々がどれだけ動けるか、また判断できるであろうかとの懸念はあった。そこで、私たちは高度における対策として通常ランニング、富士山頂ランニ

ング、また、名古屋大学の低圧タンクトレーニング等を実施した。タクティクスとしては、先の豊田山岳会の資料と私たちの偵察結果から BC4500m ランシサ氷河上、C₁(ABC) 5300m ドルジェラクパ西稜とカンシュルム東稜のコル、C₂6000m 西稜、C₃6500m 西稜と4つのキャンプを設け、頂上アタックとした。

行動としては隊員を三つのグループに編成して、ルート工作、荷揚げ等各グループが交替で行い、グループ4～6日の行動で1日BC休養。行動日が高いグループには半日行程を組み入れ、順次高度を獲得することにした。また、初めての高度のキャンプに入るときは、同高度の行動の2回目以降とする(ローテーションの具合で必ずしもそうならない事もあるが)事とした。

最低の頂上アタック前日にはBCで一日休養してからアタックに向かう。以上のような考えから悪天候、隊員の不調時らを考慮してBC以上の登山活動と24日間として、行程表を作成した。これを基に各キャンプでの宿泊延日数等で荷揚げ装備、食糧等の算出をした。装備、食糧にはついては別項で詳しく述べるが、テントはC₁をABC的にする為、エスパース8人用1張、ダンロップ6人用1張(場合によってはC₂上げる)、C₂エスパースマキシム4～5人用1張、C₃エスパースマキシム4～5人用1張、火器はプロパンガス(1.5kg入り1本)、C₂ C₃ではEPIガスを使用する。

登攀装備として固定ロープ2000m(チシソライン200m×10)、ザイル(φ8×60m)6本、(φ9×40m)2本、スノーバー90本(テントアンカーにも使用)、アイスハーケン40本、岩稜がわずかなので、ボルト、ロックハーケン各10本(実際には不要だった。)、食糧はC₂、C₃では軽量化と炊事時間短縮のため、全てドライフーズにした。

実際

ルートに関してはBC～C₁間高度差350m、10～20mモレーンの？が続くランシサ氷河上、一部サイドモレーンからの落石の危険性はあったもののクレパス等の問題はなかった。但し、BCからC₁往復には1日がかかりであった。最初はBC～C₁間にデポ地を設けて、何度かデポ地まで？した。C₁(5100m)～C₂(5700m)間高度差600m、C₁～コル間(5300m)ゆるいアイフオール、所々小さなクレパス、赤色標識を立ててルートマークさせて問題なし。コル上部の西稜に入ってから5400m付近よりリシチから雪壁のロープフィックス工作 C₂5700m 迄、最大斜度55度(フィックスロープ360m)

C₂(5700m)～C₃(6270m)間高度差570m。ここが雪壁、ナイフリッジ、急な雪稜と続く。西稜の核心部と？だった。C₂(5700m)～6000m間約55度位の雪壁。6000～6150ナイフリッジ北側に雪庇がでている。15～25m間隔でスノーバーによる支点工作。6150～C₃(6270m)急峻な雪稜、飛雪が乗っていて、上だけ柔らかく非常に足場悪かった。斜度約55度(C₂～C₃フィックスロープ1590m)

C₃(6270m)～ピーク高度差700m、C₃～6400m、一部70度を越える氷壁約40m、ダブルアックス(アイスクリューをこのルートで初めて使用)から雪稜6400mで頂上直下のカールに出た。リッジ通しは悪いので6400m～6700m間はリッジをはずれて、カールに入りカール中央付近より再び西稜に向けて雪壁を攀じ登る。20mスタカット、60

m(斜度約 60 度)フィックス再びでリッジに上がると緩やかな雪稜が頂上まで続いた。(C₃〜ピークフィックスロープ 270m)

フィックス工作は全行程で 2220m、スノーバー60 本、アイスハーケン 2 本を使用した。また、計画では前進キャンプを C₁5300m、C₂6000m、C₃6500m と考えていたが、実際には BC〜C₁間が遠すぎるので、C₁5100m、C₂5700m、C₃6300m とした。

結果的にはメンバー欠員(ネパール隊員病気付き添えの為、隊長一時戦列離脱) 悪天候等で大きく日程ローテーションが狂ったので、各キャンプを予定高度よりも下げて正解だった。また、最終キャンプから頂上までの高度差も問題なくアタックできた。

隊員編成は当初三グループに分けて行動と考えていたが、先のような事情で計画どおりにゆかず、C₂ 建設以降は隊員の休日返上また BC へ降りての休養も取りやめ、後半は終日以降の行動を毎夜のように計画を練り、その都度メンバー編成をし直し、何とかアタックに備えることが出来た。BC 以上の登山活動を余裕を見込んで 24 日間としていたが、先のような事情で実際にはこの日数をフルに要した結果となった。

抜粋 1

登頂の記: 第一次隊 Oo

10月2日(アタック前夜)

C2 よりサポートを受けて、ここ C3 へ登って来たが、サポート隊のルート工作が思ったより難航し、C3 を建設したのが 6 時 30 分。サポート隊は、この時間より暗い中 C2 へ下っていった。

後に残った我々、第一次サミット隊、Ao、Oo、An、Paは、それから夕食の段取に取りかかり、その間に明日の行動予定を話し合った。

「明日は朝早く出発しなければいけないので水なども、できるだけ多く作って置こう。」という話になり、すべての作業が終わったのは、11 時を過ぎていた。

10月3日 第1次登頂報告 快晴

寝ようと、シュラフに入り、まばたきしたら朝が来た。

今日は予定通り 3 時に目がさめ起きあがる。

「アタマイテェ〜。」と言。今日は調子がイマイチである。昨日のボッカのつかれの上に寝不足がたたっているのだろうか。

5 時に出発の体勢になったが暗いので 6 時 30 分に出発する。テントの横からさっそくルート工作が始まる。

待ちに待ったルート工作だ。C2 から C3 への始めのころにルート工作をして、それからは、ずー—————
————と荷上、ルート工作は楽しいが、荷上は苦しい。

その荷上のあとにまわって来たからうれしくてたまらない。サーダーは、それを知ってか、トップを気持ちよく行かしてくれる。

さっそく取り付こうとしたら、いきなりラッセル！ナナナント斜面はきついが雪はもろい。ジタバタとものがきながら 5 m ほど登ると、気持ちのいい氷の壁となる。

今回のルート中初めての氷壁である。傾斜もあり氷もブルーアイスで、高度感もバツグンで、最高のピッチであった。

何本か持って来た、スクリューハーケンをここへ来て初めて使うことが出来た、この氷壁が 40～50m つづき、雪壁に変わる、スノーバーとカラビナを少ししか持っていなかったのでは途中でできるだけ、はぶいて登った。

150m ほど登ったところよりスノーバーは残り 2 本しかないし、まだ 200m 登っていないか、しきりに下を見た。青木さんとパンニマが、寒そうにうろうろしている。それもそのはずで、登り出してから 1 時間半になろうとしていた。

しかし、さすがに FIX ロープを後に 150m もぶらさげて、登るのは、力がいるし、腰がちぎれそうだ。

200m ぐらい登った時に、もう手の力では、FIX ロープを持ち上げられなくなっていた。

しかもその時に、斜面がきついの、クレパスが「パカ！」とあいていて、それに雪がかぶっているので気づかず「スポ！」と腰まではまってしまった。「オットツツ」もう少しで FIX ロープに引かれ、仰向けに落ちるところだった。下を見ると、ずっとピンを取っていなかったのでは、ここで一本、スノーバーを、さし込みトラバースする、5～10m トラバースすると、雪田に出、ここで FIX の最終点にする。

この時、下では、FIX 200m ではたりなかったのでは、10m 継ぎたしていた。「コ、コ、コシがイテェ〜。」「不能になったらメンドーミテヤ〜。」と一人言を言いながら FIX ロープを固定、下に合図を送り、無線機を取り出し、上部の状況を説明する。

「日本だったら 5 ピッチ、いっぺんにリードしたことになるなあ。」と感心しながらラストが登ってくるまで、2 時間はゆっくりと景色をながめていた。

ここからは、サーダー An、Pa、Ao、Oo と 4 人でアンザイレンして上に向かった。

ぼくは 3 人以上でアンザレンするのは反対だったが、サーダー An にしがった。

しばらく登ると An が「この上は雪が不安定で危険である、登るのを止めよう。」言い出した、でも Ao さんがこまった顔をしたのでそのまま、スタカットで登ることになった。

ぼくは、そんなことは知らず、いちばん後ろで「ハアハア」言いながら登っていた、たしかに雪は不安定だが、それほどキケンとは感じなかった。

ぼくがバテていたせいだろうか。なんやかんや言いながら頂上直下、ラストのぼくがおいつき、「セーノー」で 4 人いっしょに頂上だ！13:50 分、景色は最高、チベットの方のはるかかなたまで見える。

涙が止まらず、言葉が出ない 4 人で握手をし、だき合い感激がひしひしと体中をかけめぐ。この一瞬のために、この一年間ガンバってきたんだ！！

無線連絡を Ao さんにとってもらうが、Ao さんも涙が止まらない。全員で写真を撮り、30 分滞在で下降に移った。